1034

1034
2

宮城県図書館

女諸礼集大全巻之三

○懐妊の事

夫婦の交合を尊ぶ。嗣を求てしく孫く永く家督を
絶させんぐ〜めでさまバ男人の淫乱云ふを浅なきを不孝の
第一とすべのあり。法をもて身病あて懐妊なくるの
をいとい第〜妻に生を当てて嗣求るをすべし。嗣求る
法医書にあまたのをしれどようくたるの医師を尋ぬ
べし。交合して生を亟変化ぐりて妊のまひるの
時をのがなきのをもくべ夫婦ともに男の書命を
祝ふの雅義となる事〜。又夫の心ゆ遠ゐて不孝
なるのをいとべよく〜見といさめ。男子拾書に生を大切
にすべ。好ん妻なるべし

○懐姙の懐姙まあるざるを試る法

月経止て二三ヶ月ふる血付。懐胎の疑ひとうと
かしき付。川芎一味細末して艾葉のさんで汁にて
飲べし。暫ありて後本かり動て次第に動く付。是懐胎の
為也。又懐胎まあるざる付ハ動るなり。是を試る法あるさいれ
ども。後の害ともなるゆへ。川芎を用る付。懐姙まあるざるハ後
本に塊る血おこりて。産平癒して月経常ならずくるを血
す。又懐姙に拵ても。後かを害ともなるゆ必是を試るべし

○血風のゆへ茶を服用する法

紅花止て二三ヶ月を血て。いよいよ懐胎を極る付。さて血を殺
熟呸喊撰食沈痛等の諸症ありてなやむ事むしと。さ
のごとき茶を用べうす。月かさなり後のづうう金のく

さいとどこと茶を用ひざれど。かなくなるふのなれい。緒砂仁等
煎服し生姜各少々用べし。ゆえに血ありた。此茶を用ひて
ちくく平癒すべし。張子和の茶を用べうす。偖ハ是を血阻と
いふなり。但是ハ是ひのなきもの。一概にさしめかし

○懐姙ヶ月帯をする事

懐姙ありて六ヶ月ヨリ。帯をする。古法に生絹を八尺すして
是を用ふ。是ハ胎を安ずるの為也。女の右の紬。後ハ男子の
紋紬にて。別に絹或ハ木綿にて。六尺ヨリ長きを。地細き
ものを。安産して。右の生
絹の帯を締て生衣とすべし。帯ハ肩ヨリかけて。
色ハ黄ハ黄ハ深。裏ハ此絹を用ひて紅ハ色
黄の糸。雲竹等ハ。ハ深。生子ハ新安衣

紙衣をざるといふ。むかしいろ〳〵帯を染てきする。鼠でて生き
み。年老る人の古衣をぬいわり〳〵あてきそ〳〵むる附きそ子
孫命長しといふ。男子は父の古衣。女子は母の古衣をりちひて
誕生日一ケ年十二月迄は新きさ衣おをきそ〳〵むるまをといまむべ。
紙をめん布は帯を用べし。絹はかるゝず〳〵用べうべ

○六ケ月は帯をいろ〳〵帯といふ説
は帯をいろおびといふ。いろ〳〵説多し。源氏物語の中の
は巻は。いとゝづかとなが川る擬の帯をゆり。又藤の帯
などは。四ちゝなびとみ。先いそぐをむすびゆふをすて。ゆふ
そぐの帯といふ。ゆふ説なもごと。猿曼禅をそぐの
なびといへは。は説もいろ〳〵あるべ。云傳へるいろ〳〵帯
は説あるべし。文字は繁膚帯と出べきし。和名抄に代より始

万ゆ懐国ゆゆを鱶といふ。天鱶蹇天鱶樺紙をもむ
あて懐姙の婦人の懐中ゆゆを行して。岩膚帯といふ
ゆべし。中巾帯をもむ。むかしは此帯をせざるをもし。を代は後帯を
するゆ六ケ月はおゆ後はすべし。産ごとは用ひて。結乳みゆは
をらず。きはめて産安しと。実叢便方といふ医出はんへ。
後帯は巻ゆかゞん。ちゆゆゆ。功者の女は用て可なり

○懐姙帯をする吉日
壬子　戊戌　丙戌　辛酉　己巳寅　辛寅　丙子　己酉
戊子　甲子　庚子　壬子　毎月朔日代日を用べし
塞は方はむうてなすべかゝ

○懐後十月の事
書くにゝる示は一かゞずきいへ。今こゝふれて姙女はゆ

とするハ菓子ハ温なり。佛教に従い給ふ人ハ
神月を猪鹿と名づけて。此月大変なるの時きの食ハ脳
辛を忌て食すべからず
二月を姙育と名付く。みぐりの芽ざしハ孝勝を生じ
三月を姙胎と名付く。おどろきさいぐるの血をなす。おどろきさいぐるの
を禁ずべし。此時血をめぐらずして。ついに形をなせざる
赤宝まるべし。おを見て驚ずること。母者を見て魂きを人をこび
恐きを見ること。あるを香をかず。けがらわしきを聞ず。味の悪き
を食ずべかるべし。すべて心を安き智恵かしこく聖賢
ハ人を学ぶ人をまり。そ男子を求ずと云ども。母子矢牡
馬をすべて丈夫のごとくあつふりの紙を巻ずべし
又女子を求んと願をば瑠璃瑠璃をもて。女のすがたのかぶり

とする所具すべて女子ハそあつふ所を。ふをくいつふ下
を笑の表の表をよみ。ハ人を使をそ。ハかりの小分浄
瑠璃の温暖を安るをいはゝむべし
四月めハ水精を受て血脈なる心志を柔和みして矣多教
ばかし。含すべし
五月めハ大精を受て乳をなしたがそく所之指ハ分ばば
はひて陰す脆も食るをかさき物。含すべし
六月めハ令精を受を筋をなす。眼に皆そなる。形よ
大充るるなどを見るべし。耳こさ矣さうの含すべ
七月めハ本精を受を骨をなす。之指をけく分をつゝ動すべ
右の一ゝ強く身をつふべ。を物を含ずば。悪の方
ようを試べし

八月めハ古精を又膚皮九竅ゑるゑ紙ゑ切ゑ長を
切すて燥るもの食ハくうす
九月めハ石精と又毛髮ありて又猪六猪そゑハる。後ゑとれ
其ゑくものをかしづ食すくしゑ仰えそうもの〻ゑ〻かず
十月此附軍節人邪皆備るる附のいるを結て生るゑ保養第一なり

○情姙 牙持 夢 食物 書生ゑす

情姙ゑ極るハ其毎 考 總を極て脂元を書べし。房ゑ書
ざかるべしんを切ゑおそ紙いそかくつうべし。食ゑハおし
涼るいんゑかゑず。無きを食ゑべうべ。衣彼ハ温ゑと考る
ゑ。きるハ写ううず。ゑしく言すみう色。るき形くとの
ざしなどすべかるべゑしく生する半あしく色を見べか
らず。鉛ゑしく仰べうべ色濃すべうず。一切の味耳ゑそるもの

ゑうゑ色氣あるもの世臓辛辣酸菓乾脂ゑるれ教ゑ
常ゑ食しあをざる姙しくあるしき食物食すべうん

○情姙ゑうしかゑ食物

鶏肉と糯米とを食合すゑハ生ゑ子ゑ白ゑ出ゑ
鉢羅雉子ゑ食べハ瘡を療多し
鹿を食すゑハ生る子缺唇となる
鱉を食すれハ項短きゑ子ゑ出る
蟹蟹を食ハ横生ゑて子横ゑ生る
薑ゑ食べハ生る子ゑ指多し
薤と酒と食合すゑハ生る子多婬すゑ孤を考べ
無鎌魚を食すゑハ。雖生産するなり
菌茸を食すれハ驚風すゑ夭命

雞子 葱 韮 蒜 御子 蓮 鶏 鶏 椒 梨子 杏子 梅 桃 栗 梨子

柿 瓜のるい 菜の類

たゝしかよく毒を去る医師よりて合物をこゝろべし

○同豆 麦 食物のるい

大麦 蘿蔔 牛房 独活 蔓菁 胡荽 蓴

麩 飯 粥 鶏卵黄 白柿 ゆ〻 うず

○麦おんなはれる 麦いを 麦のあれば。医

麦用よなるべき人参を蓄ずべし

師をまねくべきもなきものゝ。上よりて医師を招て

を付ゝ用ゆべき薬をりゝひ置。急なる類をすべし

○又柔糯 小田石 硬炭を用をすべし。麦汁かゆ

血暈して目はまうるゝ付右蓄置る粉の中へ硬炭

或ハ小田石をよく出を焼て。右の粉の中へ入て。麦粥かゆ

かゝしむべし。そのまゝ用る法はくりのこ。法安朴義を用ゐし

○僧生地薬 沸湯を用る 雑

絡内の子。附を用て生地もんとするあるゝ。水ひとし。先を破

ゆと名付。僧ゝ戸穿 水くいり。附僧生薬を用ゐし

白芷 大竜肝 石斛 書 滑石 名多々 耳草 サ

右細末して薬一ふくゝ

世俗僧生地沸湯にて用ゐ

麦粥 巫山伏。或ハ出麦粥の法 麦粥

麦ゝ麦粥僧人ゝ世。いつめ。くゝめ。彩汲 麦粥

まゝあり。かゝるべ用ゐ。血ハ多を出ずく凝る

なるべし。やめとゝまる事ハ有まじ。しかれども身をかくしてかゝれて害となる事多し。用る事を忘べし。但しハ身をかくしてのゝみはあるべし。況あるを用る事を禁ずる。紙を出るとゝのれば身をそなへて。さて安産の害となるものハ。ゆゝしき悪物ひゝくゝ。ゆゝしきを水を湯にかけて用べきなり。又但生薬といふの性のよきをゑらみぶりに用べし。紙ゝ用ることなし。○又世なる書くるゝ人の云伝へくるるのゝ。伊勢といふ文字を紙に出て身をすて来る附きをいふ。ゆゝしきる新産も安産するといふ。先いふるるゝ事を絶る事伊勢といふ文字を割て読附い子平生九力といふるゝなりといふ。先ハ云ふ文育ある文字割ばへし。伊勢といふ文字を割ゝる附い人平産九力とある。そを上伊勢い天照大神の加護地ある也。しかれ神の力をそ。安く産するといふるゝ也べし。

ゝう為ゝ。伊勢とゝうひてハ。人の名をを。伊勢ハ也といたゞけてあるゝんゝをそゝを。大神宮ハ伊勢ゝうるかゝ故おゝ。伊勢ハ也の名あれハ。伊勢といひてを神宮の加力をそへあゝといふ。ゆまりれすをすぎるゝ。ゝずべく先のを祈すれちづくしてわけのなきゝ多く功ゝのゝゝ。加力て害となるゝ多し。只天照大神宮を人ゝ心ゝ信じ祈りて。安産する事一統ひゝるまゝとゝ。○世ゝ雑産のうまひゝるゝハ。生育ハ産ハをゝ。ゝゝ用力ゝくゝ。すてゝ産ゝ陰てゝ加りするゝ。ゝ法。按痛なり。先ゝ産ハ按痛ハ四分発時して未正産ゝのゝ附力を用て産力ゝ手きゝ撫産ゝそゝて。逆産ゝて是ハ加のうまひゝり。按ゝうて痛ハ附ゝ力ゝ

穏婆の事を力み事かべし。さて横產逆產をとて。驚さ
さハぐべからざる事なり。あらバ。細き針をもて。深さ一二分刺て
血をとる塩をぬり。暫くしてまたもの後の上を強くもと
逆產ハ押へみづからを產ん。大なる事なり。さ
て傷を生れおろそかなり。母子ともに惑ふ事なり
○かくて產ハ産ハ安神義をもて。目を定て
仰臥べからざる事をのがるべからず。産を強て
保養すべし
○平產あるとハ。一門或ハ清和の人ハ親を本とし女本安產を
祝し母子ともに安ある事を祝ひて。產房よりもてなけく產
婦のわいとつをどするハ。産止すべし。産ハ伽する人ハ言ずと
も物語をきくべからず。いろ物語をきくとも平日とかるるこの

なるべし。人の氣を破り産日を害ある物なり。產婦ハ言ふ事
ず。氣絶ふるる事法なるべし。むつかしき物
○産衣ハ古き革なり
産衣ひろへて打ちざるものをとき。先茄子と蕎を黒焼か
て味噌汁にて用ゆ。又秘方海藻をよく煮て布にて濾
こして用ゆ。和して用ゆる也
○児枕痛のもの
蚕革の石付をきんゆ
○穏婆を名づけ用ゆ
こうけだくを名づけ
おとこ。紙こんにゃく法ハ。産婦を
ひつくわ。まずして。むつまじく洲和漢ハ下ハ

ものをて口くをさき出ぺきさらしめ附る油て。再ゝ立ざるものゝ二人
ゝ三人を重て粗毒ゝ多く絡要し。湯のこゝろ沸ゝず。赤肉
出への者ゝへ。常ゝ思をかどあて。かゝれ不在をとゝて色。右
いてとゞめ。了ゝ。ゝ用ゆ。立ぎりのと人宜なしこまづけ
立ぎし

○産生の附人はのゝ
咒生をおて。穏婆先ゝをうけ咒を書なり。さて神琴を
わげぬさきゝ。指ゝ指を巻て。咒の口中に含る樒ゝをぬぐひ
さらべ。先を板木へ依出附い。絡毒ゝ病ゝ疱瘡をくし
て。法者の招ゝ。穏婆一人ゝ母ゝ人ゝ産ゝ。
ゝよろしゝ。二人ゝ方ゝ引て母ゝ子を引つゝべし
をかゝ子のなをゝる母人の子ゝ伺ひ引べし

○臍帯を清ぐ事

臍帯を引法ゝ先整て調ゝる押揮す法ゝ小刀を引よ
臍帯紙ゝ巻て。ゝ二のゝ小刀をあて締め。ゝ度引ゝ。ゝ去ゝ度を三
枚ゝ。ゝ上ゝて引べし。ゝ法ゝ二の押揮へ口ちかゝ入ゝ糸結
芝草ゝ引結ゝを引ゝ入方角をゝひて結ゝ。臍帯引
小刀の小刀を用べゝ。作小刀ゝ引べし。武ゝ紙ゝ色ゝ歯
あて咽ゝるゝ。出ゝ児の長ゝ。ゝ出ゝ咒の長ゝ。ゝ
ゝ。出ゝ。ゝ邪冒。又経ゝ色ゝ猛病ゝ中ゝ引
ゝ。ゝ寸法の所を紙ゝ。ゝ
口へ艾灸二三ゝ。ゝ出べし。出ゝ
ゝ。ゝ度枚ゝ紙をゝ。ゝ
井戸水を彩ゝ汲て。又ゝ
湯ゝわゝ用ゝ

○押桶寸法　丈二小刀のり

押桶とは抱衣桶といへり。杉武いたし。板の本を曲てあを白く彩て。絵の具にて蓬亀雲竹を畫なり。大サハ高サ一六寸九寸八寸九寸一尺寸法ハ好ミ次第

のすハくに付小刀寸二但し略儀の時ハ押桶ニツ小刀寸法にて済べし

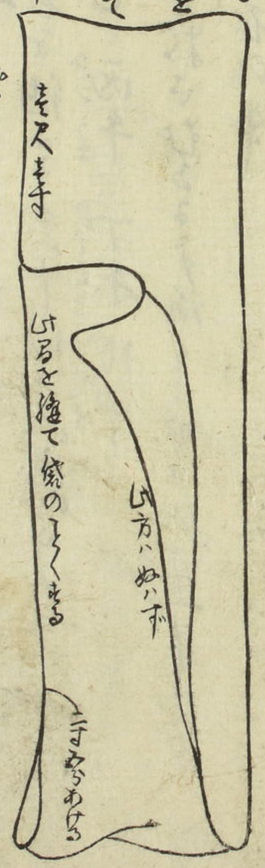
○湯上の寸法のすもうのあるをめんまてこしらへべし。長五尺寸ふちよわり

上まて寸尺寸法

所出ハ湯を

和ぬ湯を絞て

ふく家を入べし



○産の時向ひてよき方

子午卯酉の日ハ南ゑ向ひてよし

寅申巳亥の日ハ西ゑ向ひてよし

丑ゑ一二いぬ二ゑ巳ゑ六むま七ゑ八ゑ九ゑ十いぬ

十一いぬ十二ゑ　右ゑ方にむひて産すべし

○産ゑいむべき衣裳

うめめ　ゑんのもの　むらさき　紅ちり　きぐら

右の衣類を着て産やく入ばかりず。ゑみ様しきねを忌べし

○絶衣納る方角　并吉日のすぢ

絶衣納る方角ハ戌亥ハ方ヨリ納むべし　納る吉日ハ

正月ハ　子丑の日　二月ハ　丑寅の日　三月ハ　寅卯の日

四月　卯辰の日　五月ハ　辰巳の日　六月ハ　巳午の日

七月　午未の日　八月ハ　未申の日　九月　申酉の日

十月　酉戌の日　十一月　午未の日　十二月　申酉の日

春ハ　甲子の日　夏ハ　丙午の日　秋ハ　庚申の日　冬ハ　壬亥の日

右の吉日を考へて。戌亥の方の地を七尺ばかり。掘りて清め埋べし

○絶衣を納るよろしかるべき日

甲辰　乙巳　丙午　丁未　戊申

右の日ハ衣を松さむるよろしかるべし

○産衣の事

産衣の事

産子ハ先より産屋。女子ハ右のごとく神を迎さすべし。ひとへハ結ばずすべてうちうけ形くべし。産屋編と云書に曰。小児ハ襲はよきことのなきハ。一暑を過るを。形し紀衣をきせしむべらざるよし。是ハ一暑ハ世俗にいふ延生日なり。生人富家の子なりとも必形しき衣をを着せべし。今世知る人ハ富家の子ハ着をきせもべし。今世知る人ハ富家の子ハ偶と考べし。いと異れるなり。

○二日の祝儀のすぢ并七夜の内名を付る事

兒生まれて二日目。祝おうちきいと并に生土神を祭る。土神地穢を祭る。産房を清めべし。塩湯を盥の器に入て。是を浴湯乃もるなり。焼物を取こしらへ。大を割て大をとるべし。毎日ごとに

あらうべし。此日を祝の方より守力を授すなり

抽又七歩の内生れ子を祝をみぐるる人はこれをすべからず。人名を付る事を七歩の内なり。かり名とて祝名をもちてわまこ名をつけるの行儀とをり。ずいぶんいのちながくいしうさして苦理あるまでまいらんだ。偖よきうあるべし

○生産児は乳汁分るる事。生産おて六時ばかりして後吸ハすべし

初生の小児乳を吸する事。生産おて六時ばかりして後吸ハすべし

ばかりより。おハ丹連湯を用て丹丸稼物を吸ハすべし

丹連湯の方　黄連　丹参　朱砂ハ辰砂なり名のれ　朱ハあくまで

小児生産て百日の中ハ。ほのおそれこと用てよ。おれ茶ハ用べからず

○產後農生のるの

產婦七歩の内油多き食物のれ喰べからず。風をうけるべからず

異月ハ汗いでざる事うみんを分べし。ぬる湯きかの。こ共嘶の人を驚ぎけ倦労すべからず。久しく出ぬるべからず。氣をつくひ心をくるべし。嗜るるべからず。孫湯をもてつくるべからず。食中ハ程よく飲す飽す。外抱人の乳汁を用ること。髮洗ふる事髮結ふる。洗ふる事。夫ハ妻をくる。手ハ書生ハ冷べからず。ほくしむべし。倩よりれいわう大事なるべし

○因子宜合ハ

菜　茄子　瓜類　蕨　芋　蒟蒻　梨子　蒜　葱

辛辣類　小豆　萬苣　酒　砂糖　蘭類

生冷之物　麦類　柳　桃　李　林檎　橘

菓蓏の類　脂多食物　云鍾臭　雲破類

御食菓

たゝみ学医ゝ用ひて含すべし

○回写しき合和

蔥白 七日の後 海鰻 鯛 蛸 鶏肉

ひか写しき抱あべし。味すべし

○乳母をきらふべきもの 食物豆石豆のもの

乳母をもちゆるもの。乳母乳のあるゆゑ。ゆゑに冨貴なれば

ていを抱きるゝし。たゝれどもゝ味すべし

乳母は乳をのゝて蟹出す和合を乳母に抱きとよく

その乳母を抱るゝものゝ。乳母を抱るゝ中みゝて。乳も

うるはしく咲実も大きくなるがごとし。大切のもの

みをゝ乳を味するゝ。医出ゝ人ゝ。ゝひて乳母と

せざるゝのナ女を除あり

牝臭 瘡 病 痕

をとりなる女は多くひすてて。乳母をかれてたるべ
こかく扶静かして。人がらよくて。なるべ
ざるをよしとなすべし。淫乱なる女は子を
胎食を慎べし。かりそめも無しき食物を食すべ
しるるの剛乳けとなるなれば。ふれば大なる害となる事あり
世をいひつくしがたく。墨をのませしよ。乳けの色よくく
如ておくるる。人のよくたりうるもの。幸物 辣物 厚味の物
鹹物 酒 酢 その外 油氣物 油物 生
冷の物 毛物 こまかれ。情を食すべからず。乳母
のふ限らず。西母そもはしるべし。又乳けのあ。冬さきのあり
繁縷 萬苣 鯉魚 松子 塩 絲瓜の黒焼 毛あい乳け
ばよく無ようきものも。食すべ

○初生れ兒髪を剃る事

初髪を剃る事は生れて三十日めよりすべし。母産房を出るも
は日あるとなるおし。世俗七日めよりすべきなり。大抵三十日めよりすべ
かしとなくそなしてよろしからぬ。小兒は弊川よきものなり。産
沢腐なとはうまひものなり。又毛月はいつもあるかる
ニうまて剃べし。風をひかざるあり。陰を出すなり。
剃べし。夜分ともよりする法。酒又は白粉などぬるべ
毛ほは抑くそるかよし。剃ぬる方のごとくすべし

○生れ湯の事

男子は三十二日めに。女子は三十二日めに産湯をつかうべし。産湯乃中
鶴の出刃等をもぬるまをすべし。なくしきる

参りし日より。その子驕る武ハ風を引て。流行の病を起す事のなり。よく〳〵心得べき事也。世上に生土の神を氏神とおもへる人多し。氏神と云事ハ其家々の先祖を祭る神也。今此世に生まれ出るさかりの系図あしく覚し人多くありて。其生まれし所の地の守りの神へ参詣する事なるによりて生土詣といふ。生土地はその生まるゝ所の神のまへ参詣する事なり

○誕生を祝ふべき事

毎年誕生日を祝ふべし。生まれたる月日に親類朋友とも親子ともに喜ぶなるを祝ふ也。二條院讃岐の云く。今の世の人生れ日を悦び祝ひまつるハ大なるひがごと也。我ハ此日に涙を流し母の千苦万苦をおもひて今日をもけすべし。思ひくらしむなしくさまと云り。女子の身としてハ尤おハしますべへむかふべきこころあるべき事を禁

なり。さりし誕生を祝ふ事。親子の喜ぶ事を悦び。其年の今月とる日ハまくのなりしまなど。其附の事ども又母の身苦をおもひおもひて。又皆々悪く思ふるハ恐れしき事也。其さいちご義ハ又産後に母を亡し子ハ讃岐の云事のごとく其日に涙ぬきバ。涙を流し此しをかげき。扨我身のかく成長するまで成長しまバてそ。母の千苦をも思ふなるべし。さてこそ父母の恩の深き厚きを先父母をまつりて。次ぎ我身の善悪くらしぬるハさてこそ亡なひし父母をうやまひ申さんと。一ツにハかなふ。一ツにハ悦ぶべき事ぞ

○喰初の事

男女ともに百廿日めに。男子ハ男。女子ハ女のくゝむる人の事なり。男子は左の膝のうへに据。女子ハ右のひざに据て食をくゝむるま似をするなり。扨膳部ハ膳のうへに小石二ツと飯を宝珠の形

して きりと 色合すべし。くろむる 附ハ 色を 入て。橘のむろ乃
敵ゑ 行くなり。黄地の 奥ハ 紬縮を 用ゐる 物なり。 陳家 花の 方
ゑ すゑ 色を こゝろ くろむるていを なすべきなり

○ 髪 型 の 事

男女 とも ゑ こ 累代 月 す 有 り。又 累月 代 内 ゑ 有 を 擬
ひて も すべし。玉女 の 方 ゑ むら 花 花 を 付 れ ども 有 り
男 ゑ ハ 花 の 髪 ゑ 始め。女 ゑ ハ 右 の ひん より ぐ むる べし。 狩 衣 乃
本 ゑ て 行 と なり 花 人 の 役 く。 拙 式 の 図 本 を ごく 白 髪 御 紙
より うし ろ へ 付。松 竹 梅 の 作 り 枝 を かざ り。 蝶 形 の 門 高 沈
紙 菓 等 を 乗 れ ゑ かざ る 物 なり。 扇 ゑ ハ 末 廣 く 山 日 より 色 を
を こ ろ て 掌 代 を さ す べ し。 山 ろ る 紙 ハ 生 花 の 社 ゑ 有 る べ し。 神 巫
祝 宜 等 花 を 用 て。 神 事 の 儀 式 と する べ し。 狩 衣 を 被 す

こゝろざしとゆくすなり。あるひは行文とく書とゆすなり

○袴着

男子六歳ハ正月なり。吉日をあらためべし。女子ハ七月なり。ためしとゆくし。えらぶべき武法上下方そいとに六ケ敷すなり先廣蓋ハ小袖袴あるべきなり。兒ハ白衣をそ出すべし。碁盤の上ハ〻を玉女の方に向をたの見より家出て右をとゝ入る。付。ろくと紙を結び居すべし。右ハ〻ゆなり。武法いろ〻多なれバ略す

○玉女の方ゆる

何付をそを付ろれゆめ。ひろる方を。玉女といふべきそ。例ハ午の付ゆ〻ハ。午未申酉戌亥子丑寅。九ゆめ〻〻ゆ方に向ふ

あり。余ハなぞ〻へ考べし

○男子元服のゆ

元服のゆ武法あるべし。女子ハ役ゆ〻ゆ〻ハ元服とゆ。下くゆそしぬ。世間ハ男子ハ角をいゆ元服をゆ。振袖を元角をいゆ元服とゆ。ハ付を元服とゆ。ハ付ハ袖の振を留るゆ。始て文支の衣服をそ元服とゆ。元ハ元服といひて文支乃裳束をゆ。袖を形の裳束をぬぎのふけゆ。元服といひて文支ひくゆ。お髪を挑ゆを元服とふんゆ遠ひく。武家方ハ元服なとゆ。お髪をそるとゆ。文家ハ角をいゆ。文家ハ元服なとゆ。女文家ハ。ハ袖ひくゆをそ。ハ袖を留〻をゆ。又ハ。お髪ハ元服ゆ。女子ハ眉を下歯ハ

潔清神を尊ぶ。さて方々の喪主といふの一先又男子
の元服を回し。いづれも祝を結ぶ事。さて元服のる
は世間一統礼ちがへて覚てゐるなるべ。我ちがへとく
ちくわるくいふをれこがまし。かるべ。こ所く先の人がらよ
りて山人の移番あるべし

○産房をお神く条りくき日めより
産しわりて父は七日忌。母。母は三十日忌なり。八日めより
女の人同史の人は二七三日は様なり○産流しは三ケ月
までは經水はれなるべ。ほかは月より父は百日。母は十日
長かるなり○經水の様は七日なり。十日めより神社へ参
詣ふ事かるべなり

女諸往集十す続巻之三終

女諸往集大全巻之三

○砂糖の事

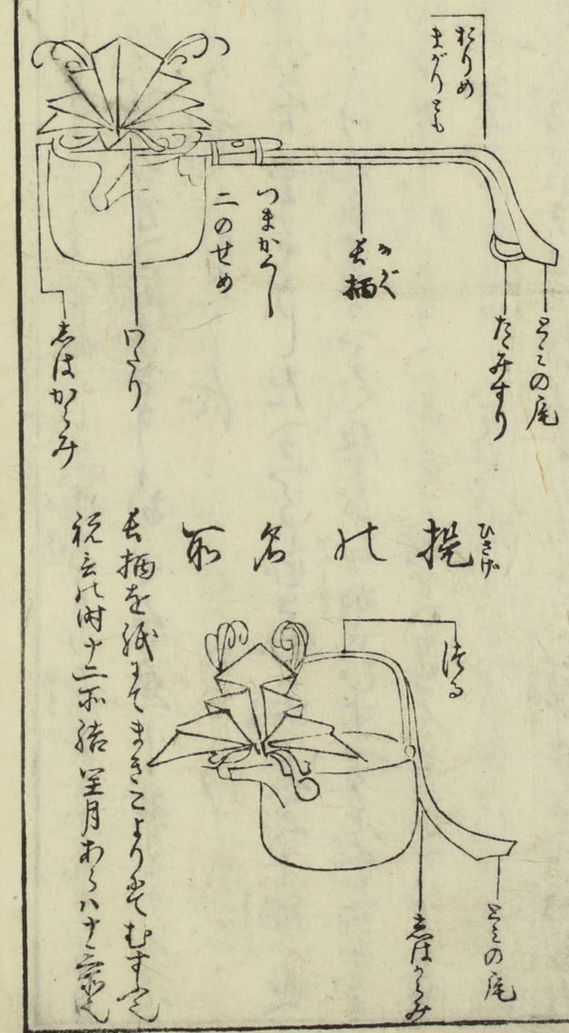
一豆をもちあるものちと高くさし初て持べし。産は角
公卿し。色上くまそれなるべ。下々は豆を産まて面角なり。豆
きかるうけなり。下々も武のうさいかりうけを用べ
一豆を産家は用いるべ人と客人と同業なるべ客人のうく
すこしよをくべし。主人客人のうくべ。人のかくよせ
いてわくべ。客人の言伝はれいて。客人の方へよをわくるべ
よりはるべ。又客の豆は客のうくんの方と。糖は別なるよわくべ
一砂糖はうは。てうしれわりめれ西。はあてそるべ。そ。おきるる
てうし。ばわりめのうくせめれきは。よをて礼べ。ひきもてうしの
大小はるべ。なくのおをそ中。産は右よて一をくまうり酒はく附

左のあをつき。右まそなぐの汐れにを掛右よなり。よこさま
じふ拍子をむうへ。はぐで。縋子拍子おいて。老人へ向ひまいるや
うにして中段はぐで。是人目づひ。ぐを附立て受流れ
は附。左のひざをつき。てうしを下に垂あれよりて受者をれて。さて
縋子をれうしろさまに三足ばかりさがり。向ひ和おも
さていぜんのごとくはぐだ。扨老人の方をゑ合目づひ。ゆて拍
子をく。三とのはちきるてとぶのよんき方うちろん甲ひあまとば
やがて老人へ拍子をりも。ひ附ゑ合よれよだずいつまも左のひざる
はきて拍子をりさ由よ。あうふひざをとするなり
一ムゑのう。破の左とムるべ。仕数ようべ。左へムゑ
らをざる附い右へムゑ。ずいつまも老人の中方を後よきぬゆうへ向
なるべ。ざえいはおより右の方へ左数をへムゑ附い。破の左の方へ

てうしをさきしあ。ムゑ向ふ。みはおうはたをうるゆる
ゆうへ。破の右の方へ縋子をさきあてムゑ。ずいて。ムゑ
き。破よりをへくあるべ。
一ひさげのうりゆうてうしたへうゑいをさげい右へムゑ。縋子右へ
うゑいひさげ左の方へうゑ。たをひなおいむすぶとへムゑのかべ
ゑは山ゆ拍子。破まるへ人いあをたへムゑまる人いなをとへ。をとを
破ていへ。ひさげの拍子へ。はるゆ中段を右のゆ拍子左の
下ゆ左の拍をかき拍て拍べ。みたのゆ左拍へ人へ拍とけ
へ拍ゆて。撓のをとをを拍ゆもるべはも同おへ。をき
る縋の破をるゆをを。左概はんゆるて右へをべ
一破ゆむまべいゆる。左ゆいむゆへ。正月い年うゆるをゆまて
わゆる破をゆとゆ当一へゆあへむをへ人の附い。むゆべ右へ移動と

たるべし。さて〻ば右の方へ重ねり。砂の左の方へ出べし。山付を後左の方へ向べし。砂の右の方へ向べし。山付を後左の方へ向べし。左の附の山ゐ高く高くまた上方を後まなせば見を結ぶとなし。左の附の山ゐ高く高くまた上方を後まをぬるべし。左右ともに上方の方へむきはて。高く〻高く〻

紙ふくれ名取



名柄を紙にてまきこうそむすび
紙にて付け二ぶ結 望月あゝはけ二ぶ

一揚かて砂れる。尾をあまそかくいて寄るべしたうすぐふを
よるべし。又裏はかまを重ねをうけいて寄るをてよりあるまりをいを
ゆ。きんをひし。揚かを酒なくなりてくゐる附よれすぐこれ結るべ
一てうしと重を一方よりおれ寄るすべる附。紙をを重を同じ方さに
おてお。一人は酒寄りて酒はの重の方をゆ。さるものをいづをを
かくれどもの附はさるをはてうしおて。扱一人寄る西おいそよれ
ものをんを酒なり
一熨斗の砂れる。二ぶあるをて方西べし。くるくゐ左ぶ中くゐ。山附は加へは
右らるべし。紙ふれにとひさげのにしの合ゆうをくゐるべし。酒をも
むすび寄くなり
一寄入の砂のる。一ぶまあるをてくゐるべし。くるくゐは七ぶまはくく
右のひさををてくゐ酒べし。寄入砂はあ紀ある小性の没なり

角力

一越じて上中下とも。砂糖。蜜のうちを居陽ぬきうよんゐて去年を
まべし。但欠々人もそんゐをなすべし。又年数よりて如くあるゐ附ハ
除ぞるゐ如ゐ丸者ひをしてれへし。縫く寸をあべきすり打要く
一せこれてうしはすり。蜜をハ小角ますくまぜて紙ぬれるうのうへ蜜
ておろしは湯の砂の附ハ湯ぬれ口ハ蜜をのをてあすく。一人のをて
ゐりハかるけをゐをうんぜこをへをいるす。上ハ出ゐお。丸ゐ
おて。蜜ハくこを切る附つきくの出儀流へゐをすもるすをせを
つをとふこ。もうくの何も鉄くれ酒の附ハさいくせをいををり。又
多人数の附ハせこれてうしいくをうをあべし。三多人ハもこれあるすも
ゐなり。又芝居をおそも。丁まるゐ。砂のすい先砂人ゐちゐめを
その居ハまをなりとをんかゐひゐはりを砂ゐるべきすり
一せこれ者とて別ハあまるすハゐはゐくゐ。浮あゐおゐる者附あゐ

おてあををゐをれゐるしてせこれ者とあすべきん。熱てれ産数
度くゐ。ハれさゐお七桂もれ桂もあべし。せなき附ハ二三桂ゐ蜜く
はゐめあるゐれ者をハ沈身くゐれて入度し。芝者おるゐ人の色
一者細ゐ半。鄂ハ三桂ゐ桂行ゐ組合。寄に組ゐり。嫁ゐるゐれ
附二桂六桂八桂なで隅ゐ組合すべきすれり
一者をゐ附。年をとつぎ年をゐのゐをこゐゐはべくゐ。ゐ者ゐ
志せん又ひさげのうしゐを無るすゐるざゐ附ハ目をつゐよしを
去てゐるべし。かくせくく家生ひをして無ゐへいるすゐす。熱
して万すふゐてゐを四ぐんすくを家をつゐべし
一押へのおとゐすゐ桂ゐれ者をいべしてゐ。神ゐいべしゐる者ゐを
をれきへて今一鉄中上家ゐんゐ。押の春ハ例演形或ハ扇地紙
形をべく。そをゐ岩ぐをかざり。但季代年本をゐくゐて桂ゐ乃

者を紙屋にてかうこ。箸をとりてあすく。箸附は三宝は四季に
應じて彩色を作りものかて立。者を組てあす。又押へは富士山
髪といふものをとをあすあり。三方は章吾の作り花をかざり立て
者を組屋ておすく。章吾和名。山ぶきといふ。ふきを富士に
なぞらるなり。又つえの箸の形を板の板にて作り者をとり
てあす本ものを宝子といふなり
一ムをする事。ゆるも家形をあつて内は入てムを通べし。さり
ながら又庄家はよりて。いろはつまりてうば。家形を隔てあり
ムをうべ。さゆうれ附はひさげを用へてムをうべ。一ムはは
さごはるまぐるなり。又正月をどや祝ふれ附はいろはにつまりム
をを用へいりてムを通べし。家形をたべてムはるうす。ゆめ〳〵ある
べからず。常れ附といかるべし

一ムをいべして。者をあしム。亟所のす。あ人は本うムりんなるば
あ人の方は。亟を亟ムと。あ人下たいなるば。亟人の方は亟を亟べ
者は下庄は付と考べし。さ〳〵あ人を人同等なるば鮒のあいさを
人とあ人と亟は本うムんのムはるはるべし。あ人はは本うムんの
ムんのムはるはるべし。あ人とは一本うムんのムはる形要なり
一亟をもりて。鮒はをもり。さて者をあすべ。吸物はをいべ〳〵附を
吸物をいべ〳〵鮒はをいべすく。鮒茅の附は吸物の猪は亟を猪べ
附て本すはり。亟は附亟はよりあり。吸物をあけはムを合て
あ〳〵亟を付て箸をとるはるべ附。者と鮒はとうちつぎてあ
一鮒は文丸焼しなす。たくべむひはは人はつすは右のはこわく
すれさくこうてたすて物をかくべつすべきなり。用〳〵なるべ
人よは。尤右とりふはこうて焼すべ。又老人は焼〳〵附を本物

を先へなして祝ふのかくのごとくあげひげをつけて
まいゝゝするものなり
一ひさげをいとぐちうたうさてうしれくゝ持くゝなるひかる人まの花
右こもかをまく振へし。又むうをくゝりの時は巻も右まつるをえら
て花のまて挑のはさと。座を持て渡べし。所永まて用ゆる加人鵜を
はんはなり
一敬をえんは。盃を持る人まさをいかりうるうろしゝ。右りこて
れまびごーにのびわぐてはぎんもんぐすゝ。ゝかくうろしゝ
又人合えかゝひまべし。盃ゝ
とふいゝみる人などおいんはてはぎゝべし。あてつぎゝは石礼の
いゝうゝ。酒をうけゝ人を盃をあげゝを又いゝ引ゝもあゝくら
ことゝまてうしれにをさぐきゝ付ゆすあゝうゝだゝ。敬人は

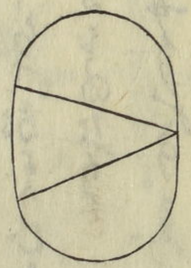
酒をつぎゝておしわとへたうりてかてこまるべし。老人のは盃了
つぎゝ付ハ左ゝ人ちと我永をちづむうんまて。祝れ先を上を
はぎゝんはあるべし。うやまひれ者ゝさりかがうをゝしゝく人
乃目まうるまうまハまべうゝずゝ。又礼酒ゝ必てつまうる人者ど
まハうゝをんしてはぎゝーさうべし。老人の下さまれ人まは敬ま
さ上ゝ付ハぞうしれ扇を出くゝれてゆつぎゝ。又所をあむつぎゝ乃
○歯ひ方沛猪の部
一毫の猪まくれのゝ。尤のをむふのさまうれ人まれうう
まてたいのうゝをのせ右まてハ毫れふちを持ゝ。下にはきまれ
尤のをぬき。あまて毫をるを。右のをまて取ぬまをれわ
三ゝ。ーわーてのさひさをゝてうひうさそてうひさをつきて
又よれひさを立ゝてうゝ。先をわ乃猪といゝ。毫のふちの

そぢめハ客人のむこ。或まへよりあるものゝ。蔓みかぎゝず。伽まて
をそぢめまゝりのハ右のんゐなり。茅れ猪をもあるも大うこの
んゐ。あのうちをバ左右のよりて拍てゝづるなり
一同そへうまひのうのハ盆をりちゝ。を猪のうさあるりのをバ右ゝく
うさをうり。ひざゝくれをゝ。盆の上よりたてかへるべきゝ。二三の猪
を同じすゝく。ゝかゝ。是ハ附宜よるべ
一女中れうまひハ無じて作ゝをつくるものゝ。さて伽ても拍お
る拍を。客人ハれうきゝをゝ附。あのよりてさゝいづすべきなり
中式ハ無を人ゝ。そへうまひ二人ゝ。自ゝのなり
一食をゝる事。右のよりて拍のいをそをつまみて信れ。左へ
後ゝをゝ。をゝ附ハ右のよへうゝ左
のをつきておすゝ。をれをゝものをかゝり附ハゝるがんをゝる

るなり。ゝ汁をかゝる附ハ客人ゝうゝをきゝて中ゝ。拍
てゝづる附。猪をゝよのうさをゝてあるゝ。ゝ附をあゝ
ハれて盆のうをゝうけて。汁拍をゝ附ゝ
一ひや汁を拍ゝて拍ゝづる附ハ右をゝちゝ。左をゝを拍てゝづべ
ゝゝくさ汁を拍ゝつぎてあるゝ。ゝまゝ
一湯次あて湯を拍ゝづる事。左のをれ大ゝびをつるれ肉へよの
ゝびを左へまハして湯次のうさをあをむけそこへ後てゝびゝて拍
をうゝ。右のをハ器を拍べ。ふをを後ゝ。ふにれ湯のをゝ
うけるゝあゝ
一猪をる附ハゝをゝれあげ。ゝあとへをゝり。猪を先ゝ
ゝをひざをゝてゝるなり。猪をへゆうれ舞ゝ
一ををゝくゝ。拍先を我あとへゝ。それ肉のゝるゝゝあるゝゝ

はくし男女のさつくハ指を白ちかすく。乳陰陽のつくり祭り
一本式の附ハ。版をかくるものをバ。燈籠ゆりけるものと盆さし
指およれ梳る版をおしげ。とりてまいらせる。小女郎ばな
花をとくしきらうとゝなり
一菓子をおすゝ。本式ハ造り花。籠花さしるゝ。竝ものちる
なり。又三方竝おそもいぶすつまハ八ツ盆まそおすゝ盆ゆ
ハ老人の方へよせてをくし。又孫ゝ。げんそて菓子おす附ハ。お供の
人数などいぶすなり
一ちまた菓子ゝ。ゆるゝ本。かゝらけ方よりむきうけて。祝より二ものさ
きをバ。こゝろ次なり。花を盆ものをていぶす。又芝居などをてハ
紙屋などのをてくるゝ。かゝるべし
一まんぢうまいらせるゝ。たさるおさ人よ菓子するハ。紙をゝきて。こゝろ

きり。中をいろこがさまるべゝ。さて一ものを切てまいらせきあゝめ
をそゝ。又きりをれあげ菓子を。ゆるする一ものハをまゝ。わくなり
きりかさいかれ
でくゝ。ゆるべゝ



たきまんぢうまそを
けんるなり

一昆布をまいらするゝ。切目ゝをむけて二きをゝ菓子する
一瓜をまいらする附ハ。ものをバ。巻ものゝかたをむき。二ものまわり
まさよこにきりてまいらすべゝ。又さうり附ハわゝずゝ。ゝ花をゆゝ
切てまいらする。かゝうたさるおさ人よ菓子するハ。大きなる瓜などハ
きりゝるゝようきなり
一同かゝうやう。先ゝ瓜をゆゝ。ひゝかをきよあすゝ。ごてむきゝ。右の
ひきをゝ。ゝかゝられ方ゝうむくべゝ。たゝまるむきてちいさく一きをと

きりてうり。さてをわとを切るハ。拔うくうりてごまうそめ。うりけ
さて人のおるゆ。ゆてをとゆかあてはきいでけゆうめ。てまいう
をるなり。ハうりハ切ん事すなり。ちう。世井へ寄うする時ハち
いさいうりてさかてをおさすてをて。無ものをすしでけておすが
よきなり。西瓜をでもれかですん砂糖なくうけておすべし。附豆ハ
よるべし。瓜ハ古用中ハ九月まうり。古用すぎてハ紙拔ばしく立ま寄
ふわるとんなるべし
一梨ハ皮をうり事。ハらは方よりむきてぞえをおすん。ぞうま
ようてつえもぞるを作るをのなり
一こ柿の柿のかをうり事。まづををうりてよりかを
あれ事
一こぶ柿をハ。こぶまよりてこうのうをうりむきてこうにうをう

を付るなり

一さうめんしおどを糸にするゆへ。ぬきうけてよごさざる物。すこ
大きゆへ一にはまいらざるものゝ。ふねとの名きものなどゝまいら
まる事ちんちゆわるべきなり。うすくうすれんぢうひ見の糸沼る
ぬらうす。百りょんを付。れんらくをきす形要なり
一沖茶まいらする。茶意よのをぬふこ。右のぬをもちて九の
ゆをさへていぶすく。茶茶落茶ハ右のごとく。落茶ハ意なり
不洗帛にのをておすこ。ぶし巻人上方附ハ意天目みく
いぶすく。此附茶乃ゝはひて武法あるなり
一引後しゆ掛雑煮吸物麸羹於多ゆか猪乃ゝ
ゆをてまるなり

○遊ひ方ゝやつくのゝ法ゝ部

一さ人の出産を西ゆて言ぶ。れとさかく鼻をかみ
せうじふすまれてあけ向くく。是言ゝくあをなぐするゆ
不礼のいろく。沖おゆ居る附ゆんねずまひろぶする。あ
つゝ附ゆ有りてゆきつふ屋ゝいうぐれ。れすあゝを
寿をそひろふまぐきる。又汗をぬぐひ鼻をみぐする
れあゆ。ハ勢くゝある沖ぐさゆく。次の日へ立て。是者れるを寄
屋ゝ。又立とゆかゝ礼附いゝを目ゆさぬやうにうげよむひ
てまべし。とかゝ志居るゆも。ゆぢひいるべきゆ附
要なり

一さ人ゝさゝり。云を彫るかをゆ言ゆ。いふもうやゝくゝく
れを人の左のひざれ要りをちりてゆうけのるゆりゝさし
ひゝりれ出紬をんてゆ上。とぐれ中当要ゆ。いるゝさはそゝ

出家をゐんあげゃ人、きなるり
一同業の相伝の附い。尤のまをつき。はひぎを左きて。右のひざ
をたのひさをうくはかさ移りけ。新と名付又合かくる居てゃ
うけ〻侍るべし
一うやまひゃ人よりのゃ上る附いちと我新をうくそもけていゆ
屋。我いきのわくぬゆうとの家をひく。又若き人くい髪
小袖まも打〻薫物伽羅をあてよくゆ。さゞしはよく白
ひゃ。うくそく。老人、對していゑ礼のるふもゃ人、見うくを
ゐるあるべくゃ。尚でて老るも若きも。女るる身はあさゆゆ
新ゃ〻なをゐるべきるなり
一出家人るものを投参するる。縁〻出接姪を伺ひて結るくゃ
はきげんのなどをもちず。又ぶりゃゃ上べきるゆあるべるば

一男女共に形ゐ形の用もなきる居事勢〻みてまざきる
事なり。男女同一発る居るゆぬる。貴人の出ゆを又ゐるり
一貴人よの人よりのなど作るまゆ附いんをなくゆ出おゆをく居
ゃ用できるる。又よ出人のをのゃ上るん附と。はんゆるゆ人我
新ゆ作るとなきゆふて。を新を立のくべ。まて耳ぶて。立
字などするる。人るるものゐを用べきるゆり
一貴人、出まゐまゐるる。所方みていまゆ掛物の色を尤
事て。ゐ。右ゆて毒くれるをゐりてかくべ。をぬゐひは
我肩ゆうけて。ゐをうけて。て肩を寄るへ。ぬゐひを出れる之
上くゆて正月二ヶ日の中ゆ。ゐ。毒くゆ御板の女法礼集ゐ
一文者を貴人、さ上ゃ附い。封あくゆ武法あるるゆ
出あゆて文者を我まへゆれを。法をとき。法い我おへ引かて

ふさをれあをふけ引られ方を我うへくれるをそ重さそ又乃
おへをたのまれ大指すて打。文のかりられかわりをと右ゆて
れ。字阪の所を我方へ引ふ文名のふさすけうけへて右そて
そちたのまをそて。金子やぐきりつ文ぐりのうれも。義
りゆう。大かさ右のんはなり
一あふぎをまいりすりる。右ゆて要れ所をりちたのまを立
ん指ゆてまいりるなり
一あふぎをのをすておすおいさきを人れかくむくだかりぐ
すぐちぐへて寄すぐ。右ゆて要の所をりちたゆて指まを物
ておすぐ
一楊枝まいりすりる。盆をのをておすぐ。かきまちくへてふれ
方をを人の右へなりてまいりるなり

一鼻紙をまいらするすべ。まづ切目をはおしなし我左の神のしたより。主人の左のはし神下へまいらするし

一小神をまいらするすべ。先左の神をこさきをゆ。さて右の神をはしりの付。第九本ゆをれりてさし上りこまるべし

一花をはしりの付をかるる事。本九もをゆをなし。たよりて指と上なし。はしりの付をかるる。第九花ハなを上よりあ。表紙ゆへ捉て右のまゆうち。はしりの付をかるる。第九を右よりて。花のゆをはしりの付をかるるあるべし

一花をこれ後しれすゆ。本九もの指を上よりなすべし。第九ハもを生をゆへさげるなりべし。第九ハもをよりこと。茎のはしりさるはよこしくても後べし。はしりの付をかるるべし。ゆ左ハ時ゆを和をんはるて。自後を歩を風をよけるを生ひ弟へなり

一硯料紙指条のゆ。硯ハ後を我まへかして指へ。料紙ハ切目を我左の方ハなりて。第壱の下に指べ。主人のはしりの方ハをきすべに上る硯をれて。はしりの方ハををゆ。ふををう右の方ハ

一番盆皆盆をみすべてをゆうを上下あるをのをまるすゆ。人所或ハ家壱を歌の表第本ゆ皆所の方をまづ句をなりて。ゆを我おをなりを指ておべ。扱はおはれをさまゆれをゆ。所ゆ方を我おへなりを人ゆむうゆをうをなりべ。又盆ふ食祿ゆんをかるいて後香ゆ。をみ

何ぞそれすへておく時をは、しはあり。是のことかぎらず
すべてことすくなるを好みければ
貴人へむかふやうに心
もちゆべし

一香炉めんに香爐香筯香盆を並合するなり。香爐は中、香えこは
左、香ばしは右におくなり。ふくさし香炉の足あらば、一つをお
もて置なり

[illegible]

一香炉人に渡す時は、足一つをまへになし、二つはむかふとなすべし
請る時は、左の手にすへて右の手にて香炉のふたを取べし。又それ
をもしんにすなり
此外香の事諸礼式の部 中の巻にくはしく

一扇を上の時は、一隅み又は左右二本一本にてもきんきう

なりぶんしすぎたるほどならつみて盆にすへおく。一包とは
すかれおすく。上座の方をまへになすべし

一しよく台をおくる時、らうそくを主人くわんのさまにさしあり
そくせんくけを我方へなして置べし。又さしたる時は火をともし
してさきうへあるものなり。又らうそくに志んをとる事、ただし紙の内に
二てうも三てうもある時は、それぞれそろしてとるべし。ただ一てうならば
その侍ら立ながら志んをきるべし

一火鉢の事。足きれを貴人へむけすべし。同火に陰陽あり。炭の
おこりかたをもる所、陽の火也。半色白炭にかへるは陰の火なり
貴人来り給はば炭のうへに火をおくとみゆべし。陽の火にあて
中へぎ家来ひく。ただし消かたをもる火は無礼なり。火箸は主人
の方へふちによせかけおくべし

一同炭をたぐる。炭斗はねがうきを丸組て扨ねたる火箸
をて火をおこす。扨火だしいりとの所くなる。垂て炭を
まをて打くべきなり。さてはだうきをて火箸のもちをたる
ひて指入るなり。炭斗い桧のりおこす法あり。扨炭箸を
数なり。右のかくあり。うけて数〳〵

女諸礼集大全巻之四終